

京都春期特別集会（2）

ガラテヤ書の奥義

――ガラテヤ書1～3章――

1980年6月7日（京都）

小池辰雄

宗教改革の烽火 己が身を我らの罪のために 超律法の世界 聖意体现 信行一如 神さまとの交わりが直結 無罪者・無善者 ガラテヤ書の奥義 御霊のあるところに自由あり 十字架は無、聖霊は無限無量 恵信一如 いつも現在化する世界 後世の最大遺物 永遠的な現在 御霊の権威 エン・クリスト 人を愛する自由 祈り

【ガラテヤ1】

1 人^よよりに非^{あら}ず、人に由^よるにも非ず、イエス・キリスト及び^{これ}之を死人^{うち}の中より甦^{よみが}えらせ給^{たま}いし父なる神に由りて使徒となれるパウロ、……4 主は我らの父なる神^{みこころ}の御意^{したが}に随いて、我らを今の悪^あしき世より救い出^{いだ}さんとて、己^{おの}が身を我らの罪のために与えたまえり。

【ガラテヤ2】

……16 人の義とせらるるは律法^{おきて}の行^{おこない}為に由らず、唯^{ただ}キリスト・イエスを信ずる信仰に由るを知りて、キリスト・イエスを信じたり。これ律法の行^{おこない}為に由らず、キリストを信ずる信仰に由りて義とせられん為なり。律法の行^{おこない}為によりては義とせらるる者、一人だになし。……

19 我は神に生きたために、律法によりて律法に死にたり。20 我れキリストと偕^{とも}に十字架せられたり。最早^{もはや}われ生くるにあらず、キリスト我が内にありて生き給うなり。今われ肉体に在りて生くるは、我を愛して我がために己が身を捨て給いし神の子を信ずるに由りて生くるなり。……

【ガラテヤ3】

1 愚かなる哉^{かな}、ガラテヤ人よ、十字架につけられたまいしままなるイエス・キリスト、汝らの眼^め前に顕^めされたるに、誰^たが汝ら^{たふら}を誑^{たふ}かししぞ。2 我は汝等より唯この事を聞かんと欲す。汝らが御霊を受けしは律法^{おきて}の行^{おこない}為に由るか、聴きて信じたるに由るか。3 汝らは斯くも愚かなるか、御霊によりて始まりしに、今肉によりて全うせらるるか。4 斯程^{かほど}まで多くの苦難^{くるしみ}を受けしことは徒然^{いたずら}なるか、徒然にはあるまじ。5 然らば汝らに御霊^{たま}を賜^{たま}いて汝らの中に能力^{ちから}ある業^{わざ}を行^{おこな}い給えるは、律法の行^{おこない}為に由るか、聴きて信ずるに由るか。



……²⁶ 汝らは信仰によりキリスト・イエスに在りて、みな神の子たり。²⁷ 凡そ
バプテスマに由りてキリストに合いし汝らは、キリストを衣^きたるなり。²⁸ 今
はユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自主もなく、男も女もなし、汝らは
皆キリスト・イエスに在りて一体なり。……

●宗教改革の烽火

パウロという人は大変な人です。キリストを除いては、パウロの右に出づる者は世界史上にいない。本当にいい人です。やはり、そういう人物を復活のキリストは捕まえられた。さすがにと言ってはおかしいが、やはり神の子キリストです。

マルチン・ルターが宗教改革をするときに、その霊的な武器として戦ったのはこのガラテヤ書です。パウロはユダヤ教に対して、福音をもって戦ったのがこのガラテヤ書の証言です。ルターがカトリックに対して宗教改革で烽火^{のろし}を上げたのはやはり、最初にこのガラテヤ書です。

ところがですね、私はこちらへ来る前にルターのガラテヤ書をドイツ語である程度読んだんですが、ルターさんは、パウロほどの迫力はやっぱりありませんね。あれだけの宗教改革をした素晴らしい人ですけれども。何と言っても、パウロは大変な人です。

パウロの秘訣。これはこないだ、東京のペンテコステで私はその点を、「無教会と聖霊」（1980年3月30日、内村鑑三先生召天五十周年記念武蔵野集会）と題して語りました。私は無教会に対して、ルターがカトリックに対して戦ったように――私は無教会の出身ですが、正に身が出たんです――その無教会に対して、やはりガラテヤ書の奥義をもって戦うことができる。それで、ペンテコステでそれをやったわけです。

内村鑑三記念講演会というのが――内村先生が逝かれて今年は50年ですから――たくさん記念講演会が方々である。昔の私はその一員です、メンバーの一人なんです。私が御霊のバプテスマを受けてからは無教会からアウトサイダーにされたから、今は無教会の部外者です。ただし、キリストの直弟子たちのインサイダーであります。無教会の「内村鑑三記念講演会」の題を見てみると、大体わかる。聖霊のことを本当に掲げている、そういう題は一つもない。「一人だになし」という。これが無教会の限界です。

やはりガラテヤ書はいつも宗教改革の一つの烽火^{のろし}の文字である。宗教改革のまた土台となるような文字はローマ書です。これはバルトがやりました。内村鑑三が無教会でやりました。けれども、どうもしようがないです、使徒たちの次元に入っていくと。この頃、私はいろんな神学書もつつついていますけれども、どうしても聖霊のことが足りない。もうはつきり。これほどまでにやはり、新約の福音のパウロ、ヨハネ、ペテロが書かせられている次元から質的にズレをきたしているということを、正直、思わざるをえない。



●「己が身を我らの罪のために

では、話になるかならないか知りませんが、ガラテヤ書に自由に入らせてもらいます。
ガラテヤ書1章、

1 人^{よみが}よりに非^{あら}ず、人に由^よるにも非^{あら}ず、イエス・キリスト及び^{これ}之を死人^{うち}の中より甦^{よみが}えらせ給^{たま}いし父なる神に由^よりて使徒となれるパウロ、

という。これは大変な宣言だね。これはもう、パウロが直接にこの復活のキリストに捕まえられたから、彼はかく言わざるをえない。4節に、

4 主は我^{おの}らの父なる神の御意^{みこころ}に随^{したが}いて、我^{おの}らを今^あの悪^いしき世より救^いい出^ださん
とて、己^{おの}が身を我らの罪のために与^{たま}えたまえり。

ここに、

「己^{おの}が身を我らの罪のために与^{たま}えたまえり」

とある。パウロにとっては、「罪」というのは、ロマ書7章にあるように、

「自分のうちに別な法則があつて、どうにもならん」

という。罪の法です。それが律法の中に閉じ込めてしまつて、どうにもならん。もう一つは、パウロにとって罪は、今まで大いにいいと思つていた――

「律法の行為によつて義とされている」

と彼は思つていた――ところが、律法の行為では義とされない。義とされると思つていたことが大きな、自分にとっては罪であることが彼にわかつた。この「律法の行為」なんてなことは普通、ユダヤ人でなければ本当はわからないですよ。

「律法」をひっくり返すと、「法律」になる。ここには法律をやつている方がたくさんいらつしやる。人間が作つた法律でなくて、神さまの法律は、ひっくり返して、「律法」という。モーセに啓示されたところの律法です。ユダヤ人は律法の民ですから、もう金科玉条にしているんだ。律法にいろいろな戒律がたくさん付いて、たくさんな事になっていきます。成文律、不文律もいろいろあるわけです。「タルムード」にたくさんその戒律がある。

パウロは一生懸命だからね。

「律法の義につきては責むべきところなし」

と自ら誇ることができるほど、パウロは宗教的、道徳的チャンピオンであつた。パリサイ中のパリサイです。立派なんです。「パリサイ」というのは。その人間的な信仰的熱心、道徳的立派さはちつとも悪くない。そういう人がたくさんあるわけだ。パウロはそのチャンピオンなんです。ピリピ書にも書いてあるとおり。ところが、キリストは、

「偽善なる学者・パリサイ人^{ひと}よ」

ときた。神さまが抜きになつてしまつて、律法が神さまみたいになつてしまつた。これは律法が観念になつてしまつてゐる。彼らにとっては具体なんだけれども。本当はそれは観念なんです。具体の世界は、活ける神を神としている世界が本当の具体の世界です。



パウロも、しかし、そうであると自分は思いこんでいた。ところが、パウロは、「これは大まちがいだった」

ということは、これはわかったのではない。復活のキリストにひっくり返されて、初めて目が覚めた。それまではわからなかった。

外側で律法を破っているキリストは新興宗教でけしからん。また、キリスト信じているやつはなおさらけしからんというわけで迫害していた。無理もない。ユダヤ教に忠実だったんだから。ところが、そのいわゆる律法に対しては、キリストはそれを超えた世界の霊統を受けとって、それを集大成して渾然として一つのことにしてしまっているのがイエス・キリストです。私はいつか、「ガリラヤ湖」「ハレルヤ」37号19748、著作集第九巻『感想と紀行』128頁と題して、そのことを語りました。その預言者やキリストの新精神は、パウロは律法に執ってこだわっている限り、わからなかった。もう本当に盲目になってしまった。だから、仕方がないから、キリストはひっくり返してしまったわけです。

●超律法の世界

ステパノが、それほどにまで超律法の世界を証したんだけど、それもいいよ逆にパウロを憤慨させたようなわけです。だから、パウロのひっくり返りというものは、回心というものは、ちよつとそこらにない回心です。自分で回心した、わかったのわからないのと、そんなことではない。本当にひっくり返されて目が覚めた。それから心眼が覚めた。本当は、神に信頼しているのではなかった。彼は律法を誇っていた。即ち、やはり、霊的傲慢に入っていた。宗教的、道徳的高慢に入っていた。これが、キリストが一番敵としたことなんです。学者、教師、祭司はみなそれです。パウロがまたその一人です。

イエスはそんな律法の内容はわかっていますよ。不思議なひとだ、イエスというひとは。

「この天地が過ぎ行きて、律法の一点一角も過ぎ行かない」

なんて、キリストは言っておられる。非常に躓きの言葉です。キリストの言う「律法」というのは、神の活ける律法だった。活ける律法であって、死んだ律法ではない。儀文ではなくて、霊法であった。だから、いわゆる儀文にこだわっていたところの学者・祭司・パリサイ人、これらは実は自己を誇っている。神さまを誇っているのではなかった。それがどんなに立派であっても、これはダメなんです。これは躓きだね、この事態は。普通の人にはわからんです。立派な人ほどわからない。それはパウロもわからなかった。

復活のキリストにひっくり返されて、それから目が覚めて、アラビヤの曠野に行つて、じつくり瞑想し祈った。おそらく、パウロには十字架がはつきりと現れた。彼は聖霊に撃たれて、それからこの十字架を知ったんです。

「十字架を知ってから聖霊」



ではない。彼の順序は逆なんだ。

「律法の義につきては責むべきところなし」

と言ったパウロはロマ書7章で、

「どうしても、その律法は本当は守れない」

ということが、このキリストに目が覚めてから、わかった。だから、ロマ書7章は回心してから後の文字です。誇っているうちは、そのことがわからなかった。

自己を主張すること、それがどんなに善いことであっても、これが「罪」なんです。神を主張するのと、自己を主張するのは正反対です。だから、神を信ずるとは、神に「然り」と言つて、己に対して「否」と言うこと。

「自分もだいたいいいが。そうだな、神さまは100%だけれども、自分は10%だ」

なんていうのは、信仰ではない。自分は0でなくては。ゼロか、マイナスだ。

「神を百%に信ずる」

ということは、

「こつち側は何もない。自分を信じない。自分の信仰すら当てにしない」

ということですよ。

「まだ、私は信仰が弱いので、もう少し聖書の勉強もしたり、人を愛してからでなければ」

なんて。いつまでたつても始まらないんだ、そんなことをしてたら。ところが、自分の信念や信仰を信じている人がたくさんあるね。そして、

「もつと深くなろう、信仰が厚くなろう」

とか。キリストが、

「信仰うすぎ者よ」

なんて仰るから、

「それでは、信仰が厚くならんてはいかん」

と、こう思うわけだね。キリストもたくさん躓きの言葉を吐いてますよ。

ある一点を捕まえないと、言葉というものはしばしば躓きになる。その一点を捕まえると、それがどう言われようと、ちゃんとその奥がつかめるようになる。言葉というものは暗号だからね。だから、

「この言葉はどう解釈するか」

なんて、釈義なんかご苦労さんな話だ。くたびれてしまうよ、しまいいには。

●聖意体現

せつかく、パウロは

「律法の行為は、これは大間違いだ。信仰だ。キリストを受けとることだけだ」



と言っている。何ですか、この「キリストを受けとる」とは。パウロがしょっちゅう言っているのは、「義」のことです。

「キリストの義を受ける」

こと。ユダヤ人は、聖書の宗教は、義が根幹をなしていますから、旧約から新約にいたるまで。神の義です。

「神の義は福音の中に顕れている」

という。「正義」ではないですよ、義という字は。間違えては困る。正義と書いては困るんです。義ですよ、これは。この「義」というのは、「羊」の「我」と書く。

「羊の我」

が義なんです。牧者の指図に従って、全くその指図通りに動くことを義という。だから、キリストのことを「小羊」という。神さまの命令にただこれ従って動いていく。

「汝の御意をなさせたまえ」

という。聖意、^{からだ}聖意、^{からだ}現です。聖なる意志を身体で現じていく。聖意、^{からだ}現を義という。これは一番はつきりしている。無教会ではそういうことを言わない。聖意、^{からだ}現を義という。聖なる意志を存在、^{からだ}身体でもって現ずる。パウロのは、律法、^{からだ}行現だよな。律法を行為で現じているだけのなしです、今までのパウロは。律法を行いで現じている。

「律法の行為によって義とされる」

と思っ^ていたから、律法行現だ。ところが、キリストのは聖意、^{からだ}現という。これが本当の義なんだ。これが本当に律法を活ける律法として活かすただ一つの道なんです。

「信仰によって義とされる」

というのは、キリストの体現したこの義をいただくこと。また、義のキリストをいただくこと。いただくことが「信ずる」ということです。そういうキリストであったということとを信念として信ずる、そんなものが信仰ではない。「信ずる」というのは「受けとる」ということです。信受すること。仏教に「信受」という言葉があるが、いい言葉は好きだから、私は使^うんだ。受けとらなくてはいいかん。もつと簡単に言えば、^{からだ}体受という。体で受けとる。私は「^{からだ}体」という言葉が好きなんだ。体というのは「全存在」ということです。ただ肉体ということではない。霊肉、渾然たるものを体という。具体的存在そのものです。

● 信行一如

だから、

「義のキリストを、キリストの義を体受することによって義とされる」

ということですよ。

「信仰によって義とされる」

というのはそういうことなんだけれども、今、私が言ったようなくあいに本当に具体的に



受けとってないのが、いわゆるプロテスタント信仰です。私は無教会にいてさんざんその命題を聞いた。

「信仰による義」

これがプロテスタントの金科玉条になっている。「信仰によって義とされる」というと、その人の信仰というものが立派で、その立派な信仰で義とされると思っている。とんでもない話だ。信仰がサムシングになっている。信仰は何ものでもないですよ。信ずるというのは、相手がある。相手を受けとることによって、義を賜るんです。信仰というひとつの何か心理的な行為でもって義とされるのも何でもない。ところが、うっかりすると、みんなそうなんだよ。

「私はもう信じてますから、それで義とされます」

なんて、冗談じゃないよ、そんな観念信仰というのは。もうそれが多いんです、プロテスタントの信仰は。また、カトリックは、

「それではダメだ。行為もちゃんと伴っていないとはいかん」と言う。

「信仰プラス行為」

みたいに。その信仰プラス行為みたいなことを、またユダヤ教のやつが――せっかくパウロから、

「キリストを受けとることによって義とされる」

と聞いているのに――ユダヤ教と混ぜて、行為も混ざっているようなことを言うから、

「異なる福音はダメだ」

とパウロが言ってるんです。「異なる福音」というのが1章に書いてある。「信仰のみだ」という。マルチン・ルターがその「のみ」という言葉を付けた。

「信仰のみによる」

と。「信ずる」とは、そのような全存在で受けとるという最も激しい行為なんです。「信仰と行為」ではない。信ずること自体がもの凄い行為です。だから、信仰一如と私が言うのはそのことなんです。いわゆる派生した行為と信仰とが辻褄が合うのが信仰一如だなんて、そんなことを言っているのではない。本当の行為は、どんな破れた行為であつても、ピタリ、信と一つの質をもっている。それが本当の行為です。困るね、この言葉というやつは。とにかく、そういった、「一」の世界なんです。本当の世界は「一」なんです。私はいつか、「一の宗教」(「ハレルヤ」24号1971/12、著作集第九巻『感想と紀行』98頁)という話をしたこともある。

「信仰と行為」なんて言ってみたり、また、

「行為によって義とされる」

と言ってみたり、そんなものは全部異なる福音だと言って、パウロがここでもう一遍ユダ



ヤ人をやっつけているわけだ。

「信仰ただぞ、キリストを受けとることただぞ」

と。「義とされる」というのは、

「キリストの義をたまわる」

ということ。観念的に「義とされる」なんて言っては困る。パウロの言葉の使い方には、多少そういった律法的な角度の臭いがないことはないけれども。本当は、義を賜るんだ。

「神の義は福音の中に顕れた」

というのはそういうわけです。だから、義と恵みは一つなんです。

「恵みにより、義により、信仰によって救われる」

ということ。

●神さまとの交わりが直結

ガラテヤ書2章16節に行きます。

16人の義とせらるるは^{おきて}律法の行為に^{おこない}由らず、^{ただ}唯キリスト・イエスを信ずる信

仰に由るを知りて、キリスト・イエスを信じたり。

これは原文は、「キリスト・イエスを信ずる信仰に由る」と書いてない。

「キリスト・イエスの信仰に由る」

と書いてある。この「の」は目的格的な「を信ずる信仰」でいいけれども、この「の」を主格的にとつて、「キリストの信による」んだと、バルトがそんなことを言っているのは、それもまた非常にうがった言葉です。

これ律法の行為に由らず、キリストを信ずる信仰に由りて義とせられん為なり。

「義とされる」というのは「義を与えられる」ということです。

律法の行為によりては義とせらるる者、一人だになし。

ここに、律法という四角いやつがある。神さまがこの四角い律法をくだされた。そうすると、一生懸命でこいつをサウロはやってた。そしてもう彼はま四角になつてた。品行方正、学術優等。それでこれを誇っていた。ところが、神さまが切れている。律法を一生懸命でやって、こつちの神さまは霞^{かす}んでいる。ところが、これは神を抜きにしては本当は、あれども無きに等しという。神を抜きにしては、これはもうダメなんです、どんなに立派そうに見えるても。

「あなたはあなたのために、我々の魂があなたに休ろうまでは安きを得ないようにお創^{つく}りになりました」

と、アウグスティヌスが言った。即ち、神さまとの繋^{つな}がりがなかったならば、それ自体がどんなに一生懸命にやって立派そうに見えても、それは空しい。本ものではない。造り花



なんだ。

この花瓶の生花は本当の花ですから素晴らしい。それがもし造花だったら、どんなにもつと立派に色がきれいであってもダメなんです。こっちは生きている。

これ(神さま)との繋がり。「父よ、神よ」と、キリストは本当に神を父として、これが直結している。そうすると、ここにある律法というのは自然に満たされていく。それが本当に律法を満たす世界なんです。神をぬきにして律法を満たしたようなのは、それは「かの如く」であって、ダメです。だから、律法を一生懸命でやって、いわゆる律法をいくら行つたって、それでは神さまに「よし」と言われない。神さまとの交わりが直結されていなければ、これは本ものにならない。そういうことなんです。キリストはそれをやっていました。預言者もその角度を持っていた。ところが、パウロはこれを抜かしていたと、こういうことです。

パウロにとっては、律法は神以上のものになっていた。たとえば、いろんな文化現象、文明現象があるね。そういったものが、現代人は、宗教、福音以上のものになっている。いつまでたっても、信仰が本ものでない。

「もう、いい加減で宗教はやめてしまえ」

なんて。芸術でも事業でも、何でもかんでも、みんな神以上なんだ。私は第二巻の『芸術のたましい』のところに書いたでしよ。

「神こそは最大の芸術家である」

と。神を捕まえないで、芸術を云々してもダメなんです。第一流の芸術家はやはり神さまとの――霊的な事態、絶対次元との――とつ組みをやっている。棟方志功なんてそうだ。一流なひとはみんなそうですよ。ベートーヴェンでも、ゲーテでも。どうして、人は絶対的な世界に突き抜けようとしないんだろうね。非常にいろんな素晴らしい能力を持っているんだが。どの方面でもなかなか一流的なものを出しているんだけど。惜しいね。

「宗教は、ちよつとこれは別な世界だ」

と思っっている。別な世界ではない。一番根底の世界なんです。あなた方は本当にその証し人になってくださいよ。何人が自分に反対しようが、びくともしない。

ユダヤ人にとっては律法のために、律法が前面にあつて、神さまは影がうすくなつてしまった。キリストには、父がはつきりして、もう父の懷の中にいた。だから、律法は自然に満たされて、律法以上の律法の世界に入っている。霊法の世界に入っている。霊的律法の世界に。だから、彼はいわゆる律法は破るよ。けれども、本当は満たしている。

「律法の一点一角も^{すた}廃れない」

というのは、その意味において真理なんです。儀文的に満たすのではない。霊的に満たしている。



●無罪者・無善者

19 我は神に生きたために、律法によりて律法に死にたり。

と、妙な言葉が書いてある。神に生きようと思った。ところが、律法によって律法を一生懸命でやったら、神に本当に生きてないときには、律法によって殺されてしまった。律法を満たしていると思っていれば、大間違いだった。神さまを抜きにしていたから。本当は、ただ律法ではなくて、「神の律法」という言葉があつて、神さまの律法は聖なるものです。それを満たしたと思ったら、大間違いだった。それは、本当に活ける律法には、彼はやつていなかったから。その神の厳かな活ける律法に対しては、自分は無力であることに気がついた。

「律法に対して死んだ」

とは、そのことです。始めは、律法に対して生きていたと思っていた。ところが、本当はそうではなかった。これがロマ書7章の告白なんです。

「ああ、我悩める人なるかな、この死の体」

という告白です。だから、はつきりその後で、

20 我れキリストと偕に十字架せられたり。最早^{もはや}われ生くるにあらず、キリス

ト我が内にありて生き給うなり。今われ肉体に在りて生くるは、我を愛して

我がために己が身を捨て給ひし神の子を信するに由りて生くるなり。

と。ガラテヤ書2章20節は、パウロの言葉のうちで一番大事なものの一つです。

「我れキリストと偕に十字架せられたり」

と。これはとても大事なことです。

「十字架は我々の我執という罪を贖ってくださった」

と。正直、そうです。その現実をもう一つと言うと、今パウロが言った、

「我れキリストと偕に十字架せられたり」

とは、

「贖ってくださった」

ということ。贖ってくださったんだから、自分はもう、生まれつきの我、古きアダムは死んでいる。我執的な我というものはそこにない。「死」と言おうが、「無」と言おうがいい。ただ、「無」という言葉の方が、私は或る一つの大事なあれを持っていると思う。

「我れキリストと偕に十字架せられたり」

と。それは信仰の現実においてそうです。実際、キリストと共に一緒に十字架に掛かったんじゃないんだから。キリストが十字架に掛かって、そして私たちの罪を、我執から解放してください。罪からの解放。無罪とされてしまった。無罪者、罪なき者にされた。無罪者、これが「無者」です。無者にされた。

おもしろいね、この無という、「無者」という言い方は。無善者、善きものもない。善き



ものも罪もない。これはプラスもマイナスもないんだ。これは絶対無なんです。プラス・マイナスの相対的なものは何も持たない。善きものも悪しきものもない。善悪なしという、善も悪もない世界。

「われ生く。されど我にあらず」

という。「われ生くるにあらず」というのは原文で言うと、

「われ生く。されど我にあらず」

ということ。

「私は生きている。だけれども、もう私ではない」

と。これは矛盾の言葉ですね、「生きているけれども、私ではない」とは。そうすると、その「生きている」というのは何が生きているのか。「われ」と言うけれども、何が生きているのか。

「キリスト、わがうちにありて生き給うなり」

と、はつきり書いてある。「キリスト、わが中^{うち}にありて生き給うなり」と。何ですか、「キリストわが中にあり」とは。そう思われている世界ですか。

「御霊のキリストが、キリストの御霊が私の中で生きています」

ということですよ。パウロはそこで、「キリストの御霊」とも「御霊のキリスト」とも書いてない。「キリストわが中にありて生き給うなり」と。現実のキリストは天界に一人しかいない。みんなの中にキリストが、百分の一か、一万分の一か、一億分の一か生きているか。そうじゃないよ。全的キリストがみんなのうちに生きている。葉末の露に満月が全的に宿るのと同じことです。これが霊の世界の神秘なんです。

●ガラテヤ書の奥義

神秘といえば、こないだ、内村鑑三記念講演会で「内村鑑三と神秘主義」と題して、野村実さんが演説したらしい。それがキリスト新聞に載っていた。私はそれを読んだ。結構です。野村先生にある種の共感を感じたから、私は自分の本を送ってやった。もう少し野村先生に言いたかったんだけど、まあ、そこまでは遠慮しました。せつかく、神秘と言いながら、聖霊のことが一つも書いてない。やはり限界がある。御霊がなくて、本当の神秘なんて言えないんです。

もうどうしようもないね、この聖霊の世界は。

「キリストわが中にありて生き給うなり。御霊のキリストが、キリストの御霊がわがうちにありて生き給うなり」

と。だから、十字架と聖霊は離すことができない。ここにガラテヤ書の奥義があるんです。パウロの書簡をどれでも見てもらえん。パウロは、いわゆる神学的表現で、

「十字架と聖霊は絶対不可分である」



なんて、どこにも書いてない。書いてないけれども、彼のものを読んでみると、どうしても不可分になっているんです。みんなそこが読めてないんですよ。残念ながら。私は『無者キリスト』で、

「山上の垂訓の一番先の言葉の『幸いなるかな、霊の貧しき者。天国はその人のものなり』とガラテヤ書2章20節は同じだ」

と書いた。「霊が貧しい」というのは自分を何ものともしないということ。キリストは自分を何ものともしませんでした。そんなことをはつきり言わないんだね、牧師さんたちや神学者たちは。

武藤富雄さんが、私の第一巻『無者キリスト』の書評をキリスト新聞の社説に、

「実にユニークな言い方をしている」

というようなことを書いた。文学者の佐古純一郎氏も驚いたらしいね。

「何ぞ我を善きと言うか」という、私はあの言葉は大好きなんだ。「善き先生」と呼びかけた青年に向かって、

「なぜ、私のことを善きと言うか。神さまの他に善いものがあるか」

と。まあね、自分を何ものともしないくらい有難いことはないですよ、皆さん。あなた方、何かにならなければダメだと言われたら、どうするんですか。あなた方は立派だからいいかも知れないけれども、私はダメだね、何か私に期待されたら。

「小池はもうしょうがない野郎だ」

と。ああ結構です、その通りです。何もあなたがたに期待されなくていい。期待されたら困るよ、私は。

「そんなものは独立伝道者の資格がない」

と。はい、資格はございません。自分の側に何も資格はない。キリストという絶対資格がある。だから、私は皆さんの前にこうやって立てる。資格があるかないかを問われたら、私は引つ込むよ。資格がなくて結構でござる。皆さんは、独立伝道なさるときは、資格を持って立つたらダメだよ、無資格で立たないと。キリストだけがわが資格だ。わが資格はキリストなりと。

「まだ、こういう資格がありませんが」

なんて、謙遜もへつたくれもないんです、私は。

●御霊のあるところに自由あり

何か楽にならないですか、皆さん。

「何ものでなくていい」

と言うんだから。何かになりたいんですか。何ものでなくていい。バカでいい。大バカ三太郎でいい。あの良寛は大愚という。大きなバカ者だと。私は単細胞だ。



「先生はちつとも変わりませんね」

なんて誰かに言われたが、単細胞だから変わらないんです。

けれども、「無」とか、「一」とかいう世界に無^く尽^く蔵^くなものが、無^く量^くなものが展開してくるからしようがないというだけの話です。しようがない。

「止む得ざるなり」

とパウロが言った。「止む得ざるなり」の世界です。律法なんていうものは抜けてしまっている世界、超律法の世界。だから、パウロがガラテヤ書で、「自由、自由」と言っている。

「御霊は自由を与える」

と言っている。そこらで言っている自由主義なんていうのとはおよそ違う。私もいつか、ルターとシラーの自由のことを学会で講演したことがあるけれども。

罪から解放され、自我から解放されて、そして、

「キリストの御霊がわがうちにある」

というときに、解放されたところに本当に積極的な自由が来るんです。

「御霊のあるところに自由あり」

とはそのことです。霊法がある。自由の世界は霊法なんです。天的^{てん}必然^{ひつぜん}の世界です。天的必然が本当の自由なんです。

燕が空を飛んでいるところを見ると、羽一つで風に乗っかって自由自在に、今来たかと思うと180度方向を変えてヒューツと戻ったりする。あんなことは飛行機はできない。やろうと思うと飛行機はひっくり返ってしまう。宙返りくらいなことはやるけれども。それはかなわんですよ、鳥には。やっぱり活ける翼です。飛行機は、機械は死んだ翼だ。これが本当の自由の世界です。

こういう花だとか、葉だとか、この開き方は本当に自由なんだ。だから、天然は美わしいという。天然の美わしきを見て、ここに本当の自由の姿を見る。私は生け花なんていうのは、どうかと思う。あまり工夫してしまつてき、何だか枝でもないようなものを付けてみたり、針金でもつて何か作つたり、ああいうのは邪道だな。そこから切ってきたものを、それを瞑想して、自然の真似ではなくて、本当に自然に生けたら、ある意味において自然以上の自然になるかもしれない。それが本当の芸術だ。音楽でもそうなんだ。あるところで法則を破ると本当に素晴らしいことになる。絵でもそうです。彫刻でもそうです。生きた彫刻なんだ。ロダンやなんかもそうだよな。あまり整った彫刻はダメなんです。

●十字架は無、聖霊は無限無量

そこで、第3章にいくと、今度はいよいよ聖霊のことが出てくる。

「愚かなる^{かな}戦^{たたか}、ガラテヤ人よ、十字架につけられたまいしままなるイエス・

キリスト、^{めづ}汝^のらの眼前に^{まへ}顕^{あらわ}されたるに、^た誰^がが^ら汝^をを^{たが}誑^{たぶら}かししぞ。²我は汝等



より唯この事を聞かんと欲す。汝らが御霊を受けしは律法の行為おきて おこないに由るか、聴きて信じたるに由るか。

その福音の音信を本当に信受したことによる。

³ 汝らは斯くも愚かなるか、御霊によりて始まりしに、今肉によりて全うせらるるか。

律法の業でもって全うするか、冗談じゃないぞと。「肉」とは自己本位のことを言う。

⁴ 斯程かほどまで多くの苦難くるしみを受けしことは徒然いたずらなるか、徒然にはあるまじ。⁵ 然らば汝らに御霊たまを賜いて汝らの中に能力ちからある業わざを行い給えるは、律法の行為に由るか、聴きて信ずるに由るか。

みんな「聴きて信じたるに由る」。福音を聴いて受けとる。神の言を信じたるによる。神の行為を見たるによる。

「聴きて信じたるによつて」

でも、

「行為を見たるによつて」

でも、どっちでもいいですよ。ただ「聴く」ということばかりにこだわらなくなつて。

「御霊を賜いて能力ちからある業わざを行い給える」

と書いてあるでしょ。

「神の国は言にあらず、力なり」

とコリント前書4章に出ている。パウロは、この御霊が来てから力が溢れてしようがなかった。御霊以前と御霊以後でははつきり違う。その土台となったものは十字架である。皆さん、この十字架と聖霊は絶対に切ることができない。

地上にあつたイエスは弟子たちにいきなり聖霊を与えなかった。もう一番直々じかだから、与えようと思つたら、わけないんだ。それは一時的には力をやりましたよ。けれども、それは本当に一時的な話で、どうにもならん。キリストは受くべきバプテスマを、十字架を、贖罪を果たして、贖罪を果たしたその現実³に聖霊が臨んでくるから、

「祈つて待つていろ。そうしたら、私の今まで言つたり為したことが全部受けとれるぞ」

と。キリストはその先をちゃんと見ている。ペテロや何かが躓いても、

「今はお前たちは散るけれども、今にまたやつて来るぞ。集めるぞ」

と。それは聖霊のキリストです。そのことを本当に実証しているのが使徒行伝です、聖霊行伝です。こんなに聖霊の現実が本ものであるのに、聖書の現実³は御霊の現実であるのに、どうして、今のキリスト教の世界は、教会といえども無教会といえども、なぜ、聖霊のことがこんなにおろそかになっているのか。私も無教会時代は何年もそういうところにいきました。



ところが、1950年の11月3日、手島君と一緒に阿蘇の垂玉で集会をした時に、もの凄く聖霊が臨んできた。私は坐っていたけれども、何か飛び上がってしまったらしいね。あれは、手島さんもあの時を、手島さんのグループのペンテコステだと言って、11月3日を覚えてる。まあ、凄かったよ、本当に。女の方々が25、26人いたかな。もう、祈りの世界でみんな霊歌になってしまっただ。そして、期せずして、あるリズムができてしまう。あれは録音しておきたかったね、本当に。あれから後であれだけのものは出てこない。自然にリズムをなすんだ。みんな御霊の導きでね。私がそれから或る所へ行って伝道したら、私の後ろに光が射していたという。まあ、とにかく、それから凄いことがいろいろあった。あるクリスマスでは――武蔵野幕屋でも、あれ以後はあれだけのクリスマスはない――

「各人の後ろに白い羽の天使が二人ずつ立ってしまった」

と。それを或る青年が見た。

「先生の後ろには七人いました」

と言う。そして、来た人が片っ端からいろんな霊的な現象にあつて、杖をついて来た人が帰りに杖がいらなくなってしまうたり、肺病が治るやら、もの凄い天界の幻を見るやら、音楽を聴くやら。しかし、後からそれに躓いてしまった。

「それは聖霊の華だから、しかしながら、根っこを忘れるな。現象は現象として感謝しろ。しかし、その根源の世界を忘れるな。根源の世界に深く入れ」

と私は言っている。それをやらないんだね。躓かないのは私ばかりなんだよな、いろんなことで（笑）。よほど足が強いとみえる。

手島さんなんてものは――そんなことを言ったらおかしいけれども――なかなか、怪物みたいな男ですよ。けれども、私は躓かない。内村鑑三、藤井武、塚本虎二、手島郁郎という、それぞれ掛け替えのないような人物に私はでつくわしてきた。神さまの導きが不思議でしょうがない。

私みたいな弱虫の泣き虫の一番カスみたいなものが、どうしてこんなことになってしまったか。聖霊は他のものとは代えられないから。私の生命はそこにあるからです。私の資格はただ聖霊だけです。その聖霊も、無教会が

「十字架、十字架」

と言っているその十字架よりもっと凄い十字架が土台になっているから。それは、十字架と聖霊をただ観念的に言っているんじゃないですよ。パウロの言葉を深く祈りをもって読んでごらん。ガラテヤ書2章20節をジーツと一晩瞑想してその中に入っただごらん。もう、凄いことになるから。

まずね、自分がすつとんでいくくらい、うれしいことはない。有難いことはない。突き抜けてしまっているからね。

「突き抜けてしまつたら、先生は無いんですか？」



「はい、ありません」

と。無者だから。キリストの無者だから。自分が無者となったのではない。キリストから無を賜ったんです。無を賜ったら、無限無量の聖霊を賜ってしまった。十字架と聖霊は、無と無限無量なんです。十字架は無、聖霊は無限無量。無即無限無量と、こういうことになつてしまう。みんなこれは賜りたる現実ですよ。

「私の信仰が立派だから、深いから」

なんてことでも何でもない。誰でもが即刻にその世界に入れる世界、絶対無条件の世界です。

「先生も50歳過ぎてからなら、私もまだまだ先があるから、ゆつくりしよう」

なんて思っていたら、そのうちに世界はひっくり返ってしまうから。どうぞ、ゆつくりしないでください。さつき司会者が言つたように、「今晚この時」ということです。

●恵信一如

ガラテヤ書5章5節、

5 我らは御霊により、信仰によりて希望をいただき、義とせらるることを待てるなり。

この場合の「義とせらるる」というのは信仰的現実の義ではない。最後の完成的な義の世界です。「御霊により、信仰により」とある。ギリシャ語は必ずしもそういうように訳せないともいえますけれども。

パウロの信仰の一番中心は何といつても、十字架です。十字架によつて義を賜ることが恩恵であり、恵みは同時に愛である。だから、十字架は義と愛をちゃんと含んでいます。それを受けとることが信なんです。これは命題ではないですよ。そのようなキリストを受けとることです。義のキリスト、愛のキリスト、これが恵みなんです。ここに「御霊により」とあるでしょ。これはもう言うまでもなく、聖霊だから。これを受けとつたところには、もう聖霊が来ざるを得ない。このことはルターも或るところで大分近いことを言ってます。私はこのところのルターの註解を見ただけでも、言い方がまだちよつと足りないんだ。

「聖霊により、信仰により」

は、もちろん、聖霊が先です。あるいは、「恵みにより、信仰により」という言い方もある。これはエペソ書かどこかに出てくる。

「恵みにより、信仰によつて救われた」

という言葉が。だから、それを私は恵信一如と言うわけです。キリストの十字架、それから聖霊の事態です。「恵み」「カリス」という言葉はいい言葉だね。「カリスマータ」というのは「恵みの賜物」です。コリント前書12章で、

「聖霊は一つで、聖霊の賜物はいろいろある」

と言っているでしょ。「聖霊は一つ」というあの「聖霊」は恵み、カリスなんです。「賜物」「カ



リスマータ」はいろいろな、そこから出てくるところの霊的な能力です。

だから、「聖霊により、信仰により」というのは、もうこれは御霊と十字架がはつきりこの言葉の中に入っているわけです。そして、望みを抱く。信・望・愛。「望みを抱く」ということは、義とせられることの、最後に本当に救われるところの望みです。この義は信仰の義ではない。本当に全うされるところの義です。それをいただく。

●いつも現在化する世界

モルトマンという神学者がこの頃、「希望の神学」なんてやっている。あれを私は少し読んでみたけれども、やっぱり足りない。非常にロマンチックです。

「約束に対する希望、契約に対する希望、それが我々の信仰の土台だ」

とか言ってる。そりゃ、そういう面もあるさ。私もかつてそういう面が、角度もあつたけれども。ダメです。やっぱり、モルトマンを読むと、聖霊が足りない。聖霊の事態が足りない。

聖霊は今、私たちに毎日、現実、「今ここにおいて」という現実において、一番深く一番直接に臨んでくるのが、この聖霊です。十字架は、今もおキリストの十字架は霊界にありますよ。けれども、十字架の贖いは、二千年前に既に現在・過去・未来にわたつてのキリストの業は完了しているんです。このことはヘブル書9章に、

「ひとたび終え給えり」(ヘブル9・12)

と書いてあるとおりです。十字架の贖いは、キリストは、相対的歴史、二千年前の歴史において――これは終末的な意味をもって、内容をもって現在にも、過去完了が現在完了、未来完了として、いつも十字架は我々の前にあるけれども――その現在完了、未来完了の土台は過去完了、二千年前の過去完了の、この歴史を二つに割るようなキリストの十字架の事実です。あの事実がなかったら、我々の信仰の土台はないわけです。あの事実が相対的な過去の事実ではなくて、相対的な過去の事実が絶対次元を持っている。今もお私たちのために十字架されてある。それが迫ってくる。と同時に、

「十字架せられたり」

と我々が告白するときには、現実の十字架です。

「われキリストと偕に十字架せられたり。最早われ生くるに非ず。キリストわがうちに生き給うなり」

と。過去の十字架をただ思っているのではなくて――それはもちろん過去の一つの事実だけれども――それが現在の活ける事実として迫ってこなければ信仰の現実にはならない。

そうですよ、信仰の世界というのは、いつも現在化する世界ですからね。未来をも現実化するんです、信仰の世界は。過去をも現在化する。そのような現在、永遠的な質をもった現在です。いつぶつ倒れても大丈夫な現在。だから、掛け替えがないんです。



「明日に道を聴かば、夕に死すとも可なり」

と、論語の世界は多少、観念的だけれども、それよりかもっと激しいんです。今、現実には私たちはその世界にいるから、死んでも死なないぞというわけです。「死すとも可なり」ではないんだ。

「死んでも死なないぞ」

とキリストが言われるとおりです。今、私がここでぶつ倒れても、皆さんにご迷惑をかけるけれども、直ちに天界へ往つてしまうわけです。

「小池先生、万歳！」

というわけだ。ブラウニングのように、

「私が逝つたら、歓呼の声を挙げて送つてくれ」

という。ブラウニングのあの言葉はいいね。

「眠るは目覚めんがため。敗れるは更に勝たんがため。雲がかかるのは晴れんがため。いつも積極面を見て、前進してやまない。そういう男が今、仆れたんだから、歓呼の声を挙げて送つてくれ」

と。躓いても転んでも滑つても前進あるのみというんです。キリストを受けとっている人は、御霊をいただいていると、それだけのエネルギーがあるんですよ。

「何回失敗しようが何をか」

というものが。ある時は、方向転換するよ、もちろん。人生マラソンの勝利者である。

●後世の最大遺物

D 学園長の天野貞祐先生はこないだ96歳で仆れた。この方は身体が、私みたいに小さくて弱かった。D 中学校に入った時、身体が少し弱いから野球でもして少し鍛えようと思って、野球部に入った。ところが、滑り込みで失敗して捻挫してしまった。それがなかなか治らない。湯河原の温泉場へ行つて療養したけれどもダメだった。それからとうとう郷里へ帰つてしまった。そうしたら、帰っているうちに今度はお母さんと一緒に腸チフスに罹つて、お母さんは天界へ逝つてしまった。自分はやつと治つたけれども、どん底に叩き落とされた。それで、

「取りて読め」

という――アウグスティヌスみたいに――それが内村鑑三先生の『後世の最大遺物』という本だった。岩波文庫にもありますよ。あれを読んで先生は打たれた。

「神に仕え、人に仕える、崇高にして勇敢なる生涯、これだけが後世への一番の贈

物だ」

という結論です。先生はそれでハタと気がついた。「よし、私もそのように生きよう」と。それで、4年遅れてまた中学へ――昔は5年制だったから――5年に再入学しようと思つ



て、編入試験を受けた。16人受けて、天野先生だけが及第した。全科目の試験ですよ、これは。4年遅れたら、「お前はそれでも中学生か」なんて。

「よし、それでは、私はみんなよりか4年長生きしてやろう」

と思ったと書いてありますよ(笑)。4年どころの騒ぎではない。もう、人生マラソンの勝利者です。96歳まで生きた。そんなマイナス4年よりも、先生がそこで内村鑑三を通して捕まえたこの人生観の確立が、これがその後の天野先生というものを、自分を鍛えていくことになったんです。私はD中学・高校の生徒に、

「本当にこれを君たちは忘れるな」

と言ってやった。こないだ、全国の私学の新聞にも書いてやった。方々から頼まれるからね、書いた。来年は、天野先生の生涯と教育思想、大村仁太郎の生涯と教育思想を、この二つを書かなくてはならないので、私は自分の著作を来年は書けない。私は「D学園百年史」の委員長をしているものだからね、しょうがないよ。

何が来たって、ヘコたれませんよ。いいですか。まず、ありがたいから、聖霊は。あなた方みたいな若いのが、聖霊が入ったらどうなってくれるのかな。私も若返りたいくらいだ。76歳なんかになってしまつてね、やつと聖霊だなんて言っている。あなた方は76歳になったら、どういうことになるか。光つてしまつて見えないんじゃないかな(笑)。私はよく見えるだろ、今。大したことないから。

そういう、

「もう自分が何ものでもない」

という、こんなうれしい世界はないですよ。こんな楽な世界はない。福音でそんなことを言っているやつはいるのかね。今度は、『無の神学』(小池辰雄著作集第三巻)で徹底的に書くから。ドイツ語でも書いてやるから。世界の神学界に訴えてやる。何をかと言う。このキリストの他に私は告白するものはないですからね。今までの組織神学なんて、神さまの真理が組織でもって言えるかと。

「ドラマテツシェ・テオロギー」(劇的神学)

という。みんな笑うだろうね、自分でも笑っているんだけど(笑)。そういう世界なんです。私はもうひとつ、『放言随筆集』というのを書こうかな。バカバカしいことがたくさんあるから。

●永遠的な現在

それで、モルトマンの神学の「希望」ではない。聖霊は現在だから、神の国は成る。

「聖国を来たらせ給え」

という聖国は来ているからね、この聖霊は。聖国の、神の国の中心はこの聖霊のキリストです。だから、必ず、新天新地は、黙示録の最後の世界は必ず来る。あの黙示録に描かれ



ているよりもっと凄い内容としてやって来ます。あれはあの時にヨハネに示された啓示だからね。あれも一つの暗号だから、あの通り来るか来ないか、そんなことは知らない。それをもって予表させたところのもの凄い、誰も知らない世界がやって来る。大希望は、今その双葉が、我々の中に聖霊がやって来ると、その神の国が皆さんの中に投影しているんです。

だから、希望は必ず成るんです。必ず成る。願望ではないから。与えられたる希望は既に現在において、将来の事態がわがうちに与えられてあるから。過去も現在も未来も全部掌握しているもの凄い永遠的な現在ですよ。

皆さんが、仕事がどうだ、やれ、結婚がどうだ、やれ、家のことが何だとか、いろんなことがあるよな。ちょうど空と同じです。雨が降ったり、風が吹いたり、雲ったり、雪が降ったり。しょっちゅう天気予報で言わなければならぬ。もう面倒臭いから、天気予報はよそうというわけにいかない。けれども、そういった天気予報はどうでもいいんだよね。

「私の天気はしょっちゅう晴れてます。永遠の晴れです」

と。それは聖霊の世界だから。聖霊が来ると、そういう現実を皆さんは持っている。

「何がどうなったっていいよ。どっこい、妙になればなるほど、自分の霊的天界はいよいよ光っています」

と。そういう凶太い信仰が本当の信仰なんです。キリストを有つものは、そのような現実を持っている。

私は、お釈迦さんや何とかをみんな尊敬するよ。けれども、キリストの世界はちよつと次元が違うね。天界で使徒たちも「そうだ」と言っているよ。もう、パウロなんかはことにそうだ。世界の政治家にそれだけの魂が現れないかね。大人物が欠けている。日本の今の教育だったら、これはどうにもならぬ。もう、日本は、明治維新の佐久間象山、吉田松陰という、あのような人物が新しく出てこなければダメです。これは福音を受けなかったらダメです。そしたら、もっと凄いのが出てくるから。あなた方は、相対的な自分の資格ではないですよ。絶対無資格になりなさい。そうしたら、無限資格が出てくるから。

「よーしー!」

というわけで。

「どうにでもなりやがれ」

と。それはもう凄い事です。机に向かっている、机が鳴動しだすよ。本が読めなくなる、机が動きだして。まあ、それくらいのことを言いたいです、本当に。

●御霊の権威

聖霊のところに来たから、パウロは特にその自由のことを言っている。

²⁵もし我らの御霊に由りて生きなば、御霊に由りて歩むべし。



なんて、パウロは言っているけれども、「もし」なんて言う必要はないんですよ。

「我らは御霊によつて生きているから、御霊によつて歩こうではないか」

と、なぜ、パウロはそう書いてくれないのかね。

「もしこうであつたならば」

なんて。パウロも少しもつたいぶっている。私はこういうパウロの書簡だつて、もっと乱暴に一遍訳してみようかと思つていろいろです。だから、さっきの私の本の書評に、

「小池先生の濃厚なる特色が表れている」

と書いてある。「濃厚なる特色」という。聖霊は、決して主観ではないですよ。もう、聖書の文字はやり切れないで困つていろいろです。文字自身が。

「こんなことを言つたけれども、内容はもつと凄いだよ」

とパウロは言っているんですよ、その奥から。そういう読み方をしてください。

自分が新しく聖書になつてしまふんだ、本当に。

「汝らは活ける文字なり、活字なり」

と。「活字」というのはおもしろい言葉だね、「活きた字」と書く。大抵死んでいるけれどもね。私たちは本当の活字です。活文字です。本なんか書かなくてたつていいよ。あなた自身が活ける文字となつて動いていけば。超一級の人物は何も書かない。キリストも、ソクラテスも、孔子も。あれはみんな弟子が書いた。あなた方も超一流になつて、

「私は何も書かなくて、これは超一流になつたな」

なんて（笑）。成つてくれよな。

「小池先生なんて大したことない」

と。ああ、結構です。大したことないんです。

そういうわけで、生涯そのものが天界に天の文字となつて映つていふような――誰が知らなくても神さまはご存知だから――そういう世界に入つて、あなた方は本当に祈つてそのキリストの中に入つてごらん。もう、一人ひとり何かしらんけれども、星みたいに輝いてしまふから。そうしたら、もう凄いですよ、この召団は。そういう召団の一員一員になつていただきたい。いい加減なクリスチャンはいらない。いい加減なクリスチャンが一人いたつて、どうにもならん。本ものは十人でたくさんだ。

皆さんはいろいろな、現実にはどうにもならないような問題を持つていふ方が幾人もいらつしやるでしょ。いいですよ。どうにもならないところに、キリストは一番凄いものを与えるから。一番凄く生きるから、キリストは。御霊の権威というのがあるんですよ、女の方であつても。そうしたら、人が殺そうと思つても、挙げた手が動かなくなつてしまふ。その人の霊的実存に打たれる。

いつか、お話ししたね。非常に霊的な女性がヒットラーに、

「あなたは間違つています。そんなことをすれば、ドイツは滅びますよ」



と言った。

「なまいきだ、あいつは。殺してしまえ」

と、兵卒をやつてヒストルで殺そうとした。ところが、その兵卒はその女性の部屋に入ったら、その霊的な威光にうたれて撃てない。

「あなたはどこかへ逃げてください」

と。けれども、撃てなかったと言うと、今度はヒットラーに殺されるからね。やつつけて来たと言ったという。

●エン・クリスト

ガラテヤ3章26節、

²⁶ 汝らは信仰によりキリスト・イエスに在りて、みな神の子たり。

これは本当は、

「キリスト・イエスに在る信仰によりて、みな神の子たり」

です。「キリスト・イエスに在る」というこの「エン・クリスト」という言い方が大事です。今日の奥義の一つです。即ち、

「聖霊により、信仰によりて」

ということとは結局、一つの言葉にすると、

「エン・クリスト」（キリストに在って）

ということ。キリストの中に在る。内在関係です。これが一番本当の世界。これが「一如」の世界なんです。

「われキリストのうちに、キリストわがうちに」

という、パウロの信仰の一番の神秘的極致はここなんです。「エン・クリスト」、これが奥義なんです。キリストは、

「我と父とは一つなり」

と、ヨハネ伝10章か、14章かで仰ったでしょ。「我と父とは一つなり」と、たった三字です。これは聖書で一番短い言葉なんだ。一番短い節が一番大事なんです。「我と父とは一つなり」と。

「キリストと我とは一つなり」

と。なぜ、一つであり得るんですか。さつきから申し上げているとおり、足を洗ってくださいから。

「私はお前と一つとならなければ。お前との関わりはお前と一つとなることだよ」

と言う。関わりは——「関わり」という言葉もいらない——一如。一如の世界です。

恋人同士は一如みたいな世界だね。

「私はお前のもの、お前は私のもの」



と、ベートーヴェンが不滅の恋人に書いた有名な手紙がある。一つの世界です。我々一人びとりがキリストと一つ。そうすると、我々みんなが今度は一つなんです。召団というのはそういうんです。

「キリストは首で、我々は体だ」

という。やっぱり、一の世界です。「全一」と言っても、「一全」と言ってもいい。真理は実に単純です。一つの焦点。円に中心が二つあります。一つではないですか。

真理の最高の表現はやはり円(○)だ。どの天体も四角い天体はない。みんな丸い。地球も丸い。もし、自動車の車輪が四角だったらどうなるか。ガタンガタンしてしまう。あれも丸い。丸いものが動く。丸くないと動けない。円転滑脱なんていう言葉もあるけれども。中心が一つ。中心が一つから、無限無量に限りなく展開する。分析総合ではない。

²⁷凡そバプテスマに由りてキリストに合ひし汝らは、キリストを衣たるなり。
「キリストへのバプテスマを受けた汝らは」ということ。

²⁸今はユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自主もなく、男も女もなし、汝らは皆キリスト・イエスに在りて一体なり。

「一体なり、一つなり」

と書いてある。こういうことがはつきり言えるんだ、パウロというのは。エペソ書にも
「一つ、一つ、一つ」
と書いてある。

「信仰は一つ、バプテスマは一つ、神は一つ、キリストは一つ、聖霊は一つ」

と。もう、「パウロの奥義」なんて言って、概念で言えない。何だか知らんけれども、この「一」に集約するところの「一つ」は結局、

「エン・クリスト」

というこれが奥義なんです。最後は「キリストの中に」です。

「われキリストの中に、キリストわが中に」

という。その「中に」の「一つ」の中に入るためには、十字架の門を通って聖霊を受けとることなんです。十字架の門を通って聖霊を受けとったその現実、キリストと一つにならざるを得ない。これがもう非常にはつきりした言葉です、私が最後に皆さんに申し上げるのは。

「キリストと偕に十字架せられたり。最早われ生くるにあらず、御霊のキリストわがうちに在りて生き給うなり。キリストと一つなり。われキリストの中にあり」

という、一如の世界です。

「でも、私は罪びとですから、そう簡単には一如にはなれません」

なんて、そうじゃないよ。これは恩寵の一如の世界だから。泥があるからキリストはやつ



て来た。泥がなければ来ないんだ、キリストは。私は泥だらけだから。泥だらけの中にキリストはやって来て、キリストと一つにしてください、霊的一体現象を起こしてください。その他に何か工夫がいるんですか。何もいらんではないですか。

●人を愛する自由

そうして今度は、我々が賜っているところの知情意のいろいろな才能がある。それがもう自在に展開してくるから、これを「自由」とパウロが言っている。

「御霊のあるところには自由あり」

と。自由は何かというと、自由の内容の一番素晴らしいのは、人を愛する自由です。人を救う自由、助ける自由なんです。だから、自由と愛とは、これは本当は離すことができません。勝手にくる。勝手気儘の自由ではないですよ。そんなのは不自由です。もし、勝手気儘だったら、それは我執に囚われたもので、決して自由ではない。自由無礙むげとは、人を同じく自由無礙の人にするところの救いをもたらすものです。

「聖霊の第一の名は愛である」

と、トマス・アクイナスが言ったのは、その通りです。

こんな簡単なことはない。20世紀がどうなろうと大丈夫。もの凄くキリストの中に入ってくださいよ、もう本当に。これから祈りますけれども。投げ込んでくださいよ、キリストに。キリストは私たちを包んでしまうから。懷に入れてしまうから。そうしたら、

「万歳！ ハレルヤ！」

でもいいよ、叫んでください。遠慮いらないから。ある時は本当に、

「神のためには狂えりなり」

というところに一遍入らなくては。人間的な体裁なんか考えているうちはダメです。そういうところを一遍、爆発すると、今度はいくらでも静かな世界に入れる。そしてもう自在に、いつでも爆発できるし、いつでもバカみたいな顔していられるし、それは自在な人間になる。百面相みしたいに。私は自分が不思議ではない。

さつき歌っていたいた召団賛歌の「使徒らの昔を」の、

「使徒らの昔を」

慕いて我は

聖書みふみに読み入り

祈りてあれば

み霊の我が主は

わが身を抱き

十字架に耐え得る

力を賜う」

というのは本当に告白です。私はこの讃美歌をつくったときに、ちょうど滝廉太郎の「荒城の月」と同じような気分になってしまっ、この歌一つでもいいと思いたくらしいです。それはいろんな苦難にある人は、皆さん本当に力が来ますよ。

「み霊の我が主はわが身を抱き」



という。イザヤ書の中にも、

「牧者が小羊を抱く」

とあるよ。

● 祈り

祈ります。私たちの贖い主キリストさま。ただ今あなたのユニークな弟子である、僕であるパウロの切々たる文字以上の文字にでつくわし、そして、語るも聴くも同じこと、彼の文字の奥から響いてくるところの福音の事態に接し、聖名を讃え奉ります。

本当にパウロはあなたの霊に動かされて、止むにやまれずしてこのガラテヤ書を書きました。この千古不滅の文字の奥から響いてくるところの、あなた自身の福音そのものが私たちを打ってやりきれません。神さま、感謝いたします。

この驚くべき福音は、どのようなことがあっても勝利して行きます。どうぞ、私たちがこの聖書の文字の奥の響きに本当に全身を響かせ、そして、読むことが直ちに鳴り響くこととなり、また、読むことが直ちに祈ることとなり、読むことが直ちに行動となり、神さま、そのような私たち自身が活ける聖書となっていくことができますように願ひ奉ります。

今、兄弟姉妹たちと共に、この話にもならない私の話を通して、神さま、あなたの福音に、パウロのこの文字に接して、彼の響きに動かされ、本当に感謝いたします。僕も、^{しもべ}もはや言葉がありません。今、聖名を心から讃え奉ります。

この福音は何ものをもつても代えることのできない、我々一人びとりの生命そのものです。どうぞ、この生命そのものが響きとなり、行為となり、愛となり、自在に展開してくださるように願ひ奉ります。もはや、説明を要しません。主さま、どうか、兄弟姉妹たちが日々この聖書をひもとくときに、直ちにその世界が驚くべき聖霊の場となることができますように願ひ奉ります。そうでなければ、私たちは聖書を読むとはいえませんが、そのような新しき革命的な読み方をしていくことができますように願ひ奉ります。

本当に一人びとりがこの福音の証者となるように、いよいよお鍛えください。そして、いろいろの事実を通して、私たちがあなたと一つになります。

「われ汝のうちに、汝わがうちに」

との、この奥義の世界を本当に身に体して行きます。

かくして、主さま、本当に聖名を讃え奉ります。心からの感謝と讃美と、兄弟姉妹の全身に溢れるところの祈りと共に、聖名により捧げ奉る。アーメン！

